

中級聴解授業におけるオンライン授業の試み

田 中 典 子

要 旨

本稿では、国際言語センター全学日本語向けプログラムの中級聴解授業において、オンラインに対応した授業における実践を報告する。授業では名古屋大学のLMSのNUCTとビデオWeb会議システムZoomを併用した。スケジュール管理、教材配信、課題の管理、授業中に2回行った発表の記録にはNUCTを用い、Zoomでは学習者同士の対話活動を主に運営した。授業は個々のトピックが関連して深い理解につながっていくように設計し、基本教材と応用教材の二段階構成、および発表に向けて、対象の選別や事象の捉え方、視点をどこにおくかを学ぶための連続的な構成を意識した。結果、聴解の「聞く」部分は個人のベースでの自律学習で進めることが可能になり、双方向部分は聞いた内容について、他者への説明活動を行うことにより、自身が理解したこと、またはわからなかったことについて、話し合うことに十分な時間を割くことが可能になり、学びを促進した。

キーワード

自律学習 対話活動 二段階構成 理解 発表

1. はじめに

2020年度の春学期のすべての日本語コースがオンラインによって開講された。それに伴い、すべての授業で名古屋大学のLMS（学習管理システム：Learning Management System）である「NUCT（Nagoya University Collaboration and course Tools）」^{注1}を利用できることとなった。「NUCT」は、現在大学等で広く使われているe-Learningシステムの一つで、通信ネットワークを使った授業のホームページを運用するためのWebアプリケーションである。また、ビデオWeb会議システムとしてZoom^{注2}の使用が

許可された。さらに NUSS (Nagoya University Storage Service) というファイル共有サービスが教職員に提供された。^{注3} eラーニングの実施には学習教材の配信や成績などを統合して管理するシステム環境が不可欠である。それに加え、リアルタイムオンラインのコミュニケーションが可能になったアプリケーションのおかげで、場所の制約を受けない、新しい教育の方法が可能になった。本稿では、筆者が担当した中級レベルの聴解授業のオンラインにおける授業実践について、報告する。

2. 授業概要

2. 1 日本語プログラムの中の位置づけ

SJ320 聴解 (中級Ⅱ) は全学日本語向けプログラムの1つで、このプログラムは名古屋大学に在籍する留学生 (大学院生、研究生など)、客員研究員、外国人教師などを対象に、日常生活や大学での研究生生活に必要なとされる日本語運用能力の養成を目指して開講されている (李2019: 28-29)。SJ320 (中級Ⅱ) は会話、読解、聴解がそれぞれ週各1コマ90分で開講されているが、受講生は自分のニーズに合わせて、科目を選んで登録ができる。概要を表1に示す。

表1 授業概要

科目名	SJ320 聴解 (中級Ⅱ)
開講	2020年度春学期
受講者	8名 (博士前期課程6名、博士後期課程2名) 母語: 中国語 (6名)、タイ語 (2名) 専門: 法学研究科 (2名)、工学研究科 (2名)、経済学研究科 (1名)、 環境学研究科 (2名)、国際開発研究科 (1名)
授業数	週1回 (90分授業) 14週
使用教材	・『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ聴解 [中級]』 ・『現代日本語コース中級 聴解Ⅱ』名古屋大学オンライン教材 ・webサイトの公開期間限定のニュース動画 ・録画教材 ・自作教材

2. 2 授業目標

当該コースのレベルはCEFRではB2相当であるため、授業目標は「専門的なプレゼンテーションの要点が理解できる」ことを目標とした。専門的なプレゼンテーションのトピックは日本の文化・歴史・社会・日本語を選んだ。

また、聴解授業に必要な理解とは聞いた内容を再生できる表面的な理解だけではないと考えた。田中・近藤（2019）の実践では、理解を深める仕掛けとして、二段階のインプットとそれぞれの段階で聞いた内容を基にした問題についての対話活動を組み入れている。他者との対話活動を取り入れることで、内容を単なる情報として処理するのではなく、相手に伝え、説得を試みるが必要になり理解の深化が進んだという。

そこで、本実践でも、授業形態がオンラインに変わったとしても、理解を深める仕掛けは同様に可能であると考え、「聞く力」を伸ばすためにこれらの試みを取り入れ、授業を構成することとした。

2. 3 シラバス

次に、表2にシラバスを示す。授業目標を達成するため、選んだ教材は日常会話の聞き取りではなく、専門的な知識や概念を含んだ講義や発表などのモノログ、日本と自国についての文化的な違いを考察したモノログ、芸術作品について個人の解釈を述べ合う会話、美術館での説明、日本の社会事象を伝えるニュースを取り上げた。

表2 シラバス

週	内容
第1週	オリエンテーション 授業の進め方
第2週	日本の文化（1）「信号の話」[AJ]
第3週	日本の文化（2）「日本の色」[自作]
第4週	日本の歴史・文化（1）「隠れキリシタン」[AJ]
第5週	日本の歴史・文化（2）「徳川美術館」[CMJ]

第6週	日本の歴史・文化（3）「乱」[CMJ]
第7週	中間課題【発表1】「おすすめの映画」
第8週	日本語（1）「アクセント」[AJ]
第9週	日本語（2）「アクセント核」[自作]
第10週	日本語（3）「複合アクセントのルール」[自作]
第11週	日本の社会（1）「街のゴミ箱」「ファッションと思想」[録画]
第12週	日本の社会（2）ニュースを聞く [web]
第13週	最終課題：発表準備
第14週	最終課題【発表2】「ニュース」自身の観点から自国の諸事情を紹介し、それについての見解を述べる

[] 内の表記は以下の対応する教材を示す。

AJ：『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ聴解 [中級]』（スリーエーネットワーク）

CMJ：『現代日本語コース中級 聴解Ⅱ』名古屋大学オンライン教材 <http://opal.iec.nagoya-u.ac.jp/~ijlc/>

web：webサイトの公開期間限定のニュース動画

録画：録画教材

自作：自作教材

3. 授業デザイン

3. 1 ICT (Information and Communication Technology) 活用の全体像

対面型の授業をオンライン授業に切り替えるにあたり、授業構成を見直した。本稿でのオンライン授業は、教師、学習者が同時刻にweb上に集まり、ビデオ会議システムを利用するリアルタイム双方向授業である。

以下、90分の授業形態の内容を表3に示す。

表3 1コマ（90分）内の基本構成

	授業形態と時間配分	活動内容
1	NUCT 15分	「課題」より返却されたファイルのコメントに目を通し、解答が不十分な部分、質問に答えられていない部分について、聞き直しなどを含め、自分でもう一度考える。

2	Zoom 45～70分	0 「メインルーム」で出席確認。 1 「ブレイクアウトルーム」グループ活動/ペアワークで問題1 (提示文の正誤判断) の答え合わせ (学習者同士) 2 「メインルーム」全体共有 3 「ブレイクアウトルーム」グループ活動/ペアワークで問題2 (内容理解質問) の答え合わせ (学習者同士) 4 「メインルーム」全体共有
3	オフライン 5～30分	NUCTの「課題」より次回の課題をダウンロードして取り組む。時間内に終わらなかった部分は宿題とし、授業前日までにワークシートを「課題」にアップロードする。

「」表記で示したものは3. 2節で後述する各システムの機能名。

3. 2 NUCT

NUCTの設定項目には「お知らせ」「リソース」「課題」「小テスト」「メッセージ」「フォーラム」等があるが、今回利用したものについて、記述する。メニューバーに表示される機能の名前には「」をつけて表示し、これらを通常の語彙と区別する。

1) 「お知らせ」

機能：授業サイトのトップに出る受講者向けのアナウンスの表示機能。

使用方法：「件名」には授業日と授業回を示し、「内容」にはその日の授業予定とZoomアドレスを記載した。

2) 「リソース」

機能：授業サイトのファイルの保管場所。ファイル形式に制限は設けられていない。

使用方法：授業日ごとにフォルダーを作成し、シラバス、授業で使う自作ワークシートファイルをアップした。

3) 「課題」

機能：授業サイトの中の課題割り当て機能。ネットワーク上で、課題のファイル受け取り、返却が可能。

使用方法：各回の予習ワークシートを1週間前に割り当てた。締め切りは授業日の前日に設定し、提出物は、コメントを入れ授業開始時まで返却。

4) 「小テスト・クイズ」

機能：小テスト・クイズ作成機能。解答形式により、自動採点も可能。

使用方法：学期末の受講アンケートを実施した。授業内では使用しなかった。^{注3}

5) 「メッセージ」

機能：サイト内でのメッセージ送受信機能。「ラベル」の「重要度」を選択することで、通知のされ方を変えられる。受講者の登録アドレスにコピーを送ることも可能なため、お互いに、メールアドレスを開示せず、授業連絡が可能。

使用方法：課題提出のリマインダーとして一斉連絡に使用。受講者からは欠席連絡や、課題に関する質問を受けた。

6) 「フォーラム」

機能：「トピック」ごとにやりとりの履歴が残っていく掲示板のような機能。「スレッド」は学習者個人で作成。「スレッド」を開始したメンバーに「返信」することで、「スレッド」がつながっていく。履歴はすべての受講者に閲覧が可能。

使用方法：2回行った発表毎に「トピック」を開設した。各「トピック」には発表タイトルを「件名」に、「本文」に発表要旨、スライド資料の添付を指示した。また、自分以外のメンバーへの発表コメントを書くことを課題とした。質疑応答の時間を十分取れないときに有効活用できた。

3. 3 Zoom

Zoom はビデオ Web 会議システムの一つである。

1) 「メインルーム」

機能：サインイン後の初期設定の会議参加場所。

使用方法：「ビデオ」「コンピュータオーディオ」をオンにして、教室での対面授業と同じように参加者の顔、声が聞こえる環境で実施。

2) 「ブレイクアウトルーム」：ホストだけが会議参加者の割り当てを実行

できるグループミーティング機能。「メイン会議」とは別にサイバー空間上にブレイクアウトルームすなわち小部屋が作成できるので、グループミーティングやグループワークが可能になる。

使用方法：全体での話し合いの前に、毎回グループワークを行う際使用した。全体での話し合いより、各参加者の発言機会が増える。

- 3) 「画面の共有」：参加者のコンピューター上のファイルを他の参加者に提示できる機能。

使用方法：答え合わせではグループの中の1名が課題のワークシートファイルを、発表時にはプレゼンテーションスライドを共有して、視覚的に確認しながら進めた。

3. 4 NUSS

NUSS (Nagoya University Storage Service) は名古屋大学が提供する教職員向け教育研究ファイル共有サービスである。

1. 「ダウンロード非表示」：ファイル共有者のダウンロードの権限を制限する機能。
2. 「アクセス期間の限定」：ファイル共有者のアクセス期間を限定する機能。

使用方法：自作教材（音声ファイル）をアップロードし、上記の設定を利用し、リンクを受講生に連絡した。

4. 表面的な理解から深い理解へのしかけ

4. 1 二段階構成と対話活動

各トピックで、まずは基本教材を聴く。その際、ワークシートは問題1に提示文の正誤判断をする質問、問題2には内容理解質問を配置した。問題1では内容の概要が聞き取れているかどうかを確認し、問題2では自身が理解したことを自分のことばで答えられることを目指した。翌週には基本教材で出てきた事象の理解をさらに深めるための応用教材を提供した。応用教材についても、基本教材と同じ構成にし、問題1に提示文の正誤判

断をする質問、問題2に内容理解質問を配置した。表3の授業構成で示したように、予習では個人作業で解いてきた内容を授業内では他者に説明する。個人作業と協働による対話の往復が重要であり、オフラインとオンラインでこれらの組み合わせが実現できた。

4. 2 発表につながる聴解

本コースではテストではなく、期の真ん中の第7週と最終週の第14週に【発表】(発表形式の課題という意味で【 】で表記する)を配置し、これを評価の対象とした。これらの発表はその直前の2週から3週に渡って、発表テーマに結び付く視点を提供する課題を視聴し、発表では、自分ならではの視点や観点を盛り込むこととした。中間課題【発表1】の「おすすめ映画」を発表する前には第4、5週で、日本の歴史(隠れキリシタン、徳川家の治世、御三家の役割、尾張徳川家に伝わるもの、大名文化)について学び、第6週では、映画(黒澤明監督の「乱」)に対する話者2名の感想やコメントを聞き取った。これらを踏まえて、自分がおすすめ映画を発表するときには、どの点が推奨に値するものなのかを整理して述べることで、社会的時代的な背景があるものについてはそれを取り入れることを第7週の発表の要件とした。

最終課題【発表2】では自分が現地の記者だと仮定して、自分の国について、現在起きていることを、社会的事象、文化的側面などから改めて捉えなおして、発表することを課題とした。この課題の前の第11週では「日本で暮らす外国の人から見た“日本”」を聞き、自分が当たり前だと思っていることも外から来た他者の目にはどう映るかという視点を学んだ。第12週では「埼玉県の新型コロナウイルス対応ニュース」を聞き、埼玉県知事がこれらの判断を下すまでの背景を考察し、自身の発表の組み立てにつなげることを意識させた。

5. 振り返り

5. 1 得られた効果

5. 1. 1 自律学習の促進と共有の意義

個人作業を予習時間に割り当てたことで、まず、聞き方に変化が生じた。

聞く部分を個人で行うスタイルにしたことにより、学習者は教室で1つのスピーカーから全体に流される音声を教師のコントロールで聞くというスタイルから解放されて、各自のペースで聞くことが可能になった。教室対面授業では、聴解能力には差がある場合、どのレベルの学習者に照準を合わせるかは迷うところだが、個人作業では、LL 教室で各自が自分のペースで聞くことができるのと同様、聞く部分は能力に応じて、それぞれ費やす時間が決められる。聞く部分の指導はできないのではないかと思われがちだが、教師は提出された課題の答えから、学習者の個々の聞き間違いなどがわかり、課題返却により、もう一度聞き直してほしい場所が個別に示唆できた。また、質問の内容を工夫することにより、ことばを拾ってくれば終わりということも避けられ、オンライン授業での話し合いにつながられた。従来型の授業の場合、その場で全員の答えをチェックするのは不可能であるから、オンライン授業のスタイル変更によるメリットであろう。授業の中では、対話を起こすことに焦点をあてることができた。

授業の開始時に、何回聞いて来たか尋ねたところ、3週目以降で、内容の難度が高くなった応用教材だけでなく、その後の教材についても回数が増えていた。わかったつもりでも説明ができなかった経験を経て、取り組み方に変化が生じたことが感じられた。単純に正誤問題に○×をつけて終わりではなく、どうして正しいと思ったか、本文と正誤問題で提示された文内容が異なると判断した場合はどこが異なるのかの説明をさせたため、当て推量で書いて終わりではなく、何度も聞くことが習慣づけられた。説明するためには聞いた内容から判断した根拠を述べる必要がある。他者に説明する必然性から、わからなければ繰り返し聞くことをもたらしただと思われる。

また、Zoom では、「画面共有」機能を使うことで、グループ構成員の

画面を共有しながら、話し合いが進められたので、手元にある自分の解答と画面共有者との答えや表現方法の違いが見比べられ、学びあいが起こりやすい環境だった。画面共有者は、話し合いながら、自分の解答にも手が入れやすく、また漢字語彙の聞き取りなどでは、正しいローマ字入力のうち、変換候補が出てきたところを何番目のものが正しいと教えあうこともできた。

教師は各グループを巡回し、頃合いを見て、セッションを停止し、全体の場に全員を戻し全体の場では答えを確認していくのだが、ここでも、1名指名することで、グループのときには発表の主導権を持っていなかった学習者を選ぶことができ、発話機会が話せる学習者のみに偏ることも避けられた。また、回を重ねるごとに、学習者のほうも慣れてきて、それまでは聞き取りに不安のある学習者は遠慮がちだったものが、十分に聞き取りができたと思ったときは進んで手をあげる場面も見られた。「画面共有」では、たとえば、Word ファイルなどを共有している場合、発表者は他者のアドバイスなどで、編集を加えられる。その際、編集の内容も共有できる。個人のリソースであったものが、全体のものとして共有できることも利点の一つであった。

5. 1. 2 学習記録

NUCTの「課題」を活用することにより、提出時のもの、返却後のもの、どちらも維持され、このシステム自体が、学習記録を残していけるものとなっていた。

2回行った【発表】では、それぞれ発表後、NUCTの「フォーラム」に発表要旨とスライドをあげてもらった。その後、お互いに、「フォーラム」の「スレッド」への「返信」で、質問、感想をあげさせた。そうしたところ、授業内で十分に質疑応答の時間がとれなかった発表者も、授業外でコメントを受け取ることができた。その記録も、全体で共有できるという利点があった。あとでもう一度見返すことができること、やりとりが残せるのもこのシステムの効果であった。

6. アンケートから見る学習者のオンライン授業の捉え方

本節では、今回の授業に関してコースアンケートの集計結果を掲載する。

- 1) アンケート実施方法：NUCTの「小テスト・クイズ」にて、全コース同一オンラインアンケート「日本語コース・クラス授業評価アンケート（2020年度春学期）」を実施
- 2) 回収数：受講生8名のうち6名が回答。有効回答数6／6名（100%）
- 3) 回収期間：2020年7月30日から2020年8月6日

6. 1 授業に関する評価

内容理解について困難を感じたとする回答が2見られたが、自由記述から「速度が速すぎる」とあり、これらは応用教材や生教材などについての困難を感じたものかもしれない。質問4、質問8への回答、自由記述から「聞くこと」が上達したという手応えを感じていた様子が伺われるが、これは今回の授業スタイルが学習者個人の聞くスタイルに合わせられたことに因るのではないかと考えられる。また、質問2、質問6の回答から、理解した内容を説明する活動が理解に役立っていたことがうかがわれる。

表4 コースアンケート「授業についての質問1から質問8」

	A	B	C	D	自由記述
1. シラバスに説明されている目的と内容に沿って勉強できましたか。	6	0	0	0	このコースはシラバスの通りに進めて、目的と内容の通りに勉強しました。
2. この授業に積極的・自発的に参加しましたか。	5	0	1	0	毎週、意見を出て、交換していました。
3. この授業内容を理解できましたか。	4	2	0	0	時々音声が多すぎましたが、聞き取れます。
4. この授業に満足しましたか。	6	0	0	0	聞くことはどんどん良くなりました。
5. 先生の教え方は良かったですか。	6	0	0	0	先生がいろいろな話題を選んで、面白いわだいがたくさんあって、日本文化もよく勉強できました。

6. 授業で意見を言ったり、質問や発表したりできましたか。	6	0	0	0	日本語が上手じゃなくても、一所懸命質問しました。先生が優しくて間違った話したことはいつも直してくださいました。
7. 教材（パワーポイント、ハンドアウトなど）は役に立ちましたか。	5	1	0	0	簡単にわかりました。
8. 課題は役に立ちましたか。	6	0	0	0	課題にとって、聞くことは良くなりました。

A：あてはまる B：ややあてはまる

C：あまりあてはまらない D：あてはまらない

(数字は回答数)

6. 2 オンライン授業形態の捉え方

質問9から質問11では、以下の質問を複数回答可で行った。学習者にとっても初めての経験となったオンライン授業がどのように捉えられていたか、また今後どのような形態を望んでいるかを見ていきたい。

Q9. 来年からの学生が、この授業を受けるとき、どのような方法が良いと思いますか。良いと思うものを全部選んでください。(6.2.1節へ)

Q10. オンライン授業で良かったと思うことを選んでください。(6.2.2節へ)

Q11. オンライン授業で困ったことを選んでください。(6.2.3節へ)

6. 2. 1 望まれる授業形態

「E. Zoom や Teams 等によるライブ授業（対面対話できる双方向）」の選択が5回答、「F. 教室での対面」が2回答であることから、ライブ授業では双方向が望まれていることがうかがわれた。一方で、「C. NUCT 等による電子教材（音声あるいは動画あり）を用いた録音・録画形式のオンデマンド授業」の回答が3回答あるのは、大学院生であるため時間に拘束されない形態も望まれているのではないと思われる。

表5 コースアンケート「授業形態に関する質問」

Q9. 来年からの学生が、この授業を受けるとき、どのような方法が良いと思いますか。良いと思うものを全部選んでください。	複数回答可 (回答数)
A. 教科書を用いた授業	4
B. NUCT等による電子教材(音声・動画ともに無し)を用いた授業	1
C. NUCT等による電子教材(音声あるいは動画あり)を用いた録音・録画形式のオンデマンド授業	3
D. ZoomやTeams等によるライブ授業(TVのような単方向)	0
E. ZoomやTeams等によるライブ授業(対面対話できる双方向)	5
F. 教室等での対面授業	2
G. その他(コメントを“論拠”に書いてください) 記述(1):新型コロナウイルスのため、zoomせざるを得なかったが、やっぱり、教室等での対面授業のほうがいいです。	

6. 2. 2 オンライン授業のよい点

全員が選んでいたのは「H. 家で勉強できる」であり、研究のための時間と日本語の勉強の時間の配分がしやすいからなのではないかと思われる。また、これは今回の試みで意図した自律学習が機能しやすかったのではないかと思われる。

表6 コースアンケート「オンライン授業のよい点」

Q10. オンライン授業で良かったと思うことを選んでください。	複数回答可 (回答数)
A. 先生に質問しやすい。	1
B. 集中しやすい	2
C. 宿題が役に立った	1
D. 授業の教材がわかりやすい	1
E. グループワークがしやすい	2
F. 勉強のペースがつかみやすい	2
G. 復習がしやすい	2
H. 家で勉強できる	6
I. コンピュータやオンラインのツールについて知識やスキルが高まる	2
J. その他(コメントを“論拠”に書いてください) 記述(1):家で勉強できることは多分一番要点です。	

6. 2. 3 オンライン授業での困難点

「I. 友達と一緒に勉強できなくてさみしい」の回答数が4であるが、時間だけでなく、教室で空間を同じくして学ぶことにはオンラインの双方向でも置き換えられないものがあるのだということがうかがわれる。また、「H. ネット環境が十分でない」の回答数が4あったが、これはオンライン授業開始までに十分な準備期間がなかったため、通信環境の整備が整っていなかったのではないかと思われる。

表7 コースアンケート「オンライン授業の困難点」

Q11. オンライン授業で困ったことを選んでください。	複数回答可 (回答数)
A. 先生に質問しにくい。	1
B. 集中しにくい	1
C. 課題が多い	1
D. 授業の教材がわかりにくい	0
E. グループワークがしにくい	2
F. 勉強のペースがつかみにくい	0
G. コンピュータを使うことに慣れていない(日本語のタイピングなど)	0
H. ネット環境が十分でない	4
I. 友達と一緒に勉強できなくてさみしい	4
J. その他(コメントを“論拠”に書いてください) 記述(1): ネットがない場合は困って、相談するのは難しいです。	

6. 3 授業に対する提案

質問12では、自由記述の回答を求めた。アンケート回答者6名のうち4名から表8のように回答があった。授業形態としては、対面授業での学習者同士の活動が望まれていることがうかがわれた。トピックや授業構成については学習者のニーズに沿うものにできたのではないかと思う。

表8 コースアンケート「授業に対する提案」

Q12. この授業の中で、これからも続けていったら良いと思う所はどこですか。また、良くしたほうが良い所はどこですか。(回答4 無記入2)
回答1. 対面授業が話しや練習しやすい。
回答2. このリスニングコースはこのレベルではかなり難しいです。しかし、それは私がより多くの新しい日本語の単語を学ぶのを助けます。ズーム/オンラインで学ぶことは本当に理解に役立ち、クラスの教材や宿題に追いつくことができます。練習リスニングのトピックも面白いですが、特に長崎の美術館や名古屋の徳川美術館、そこに行きたくなります。このレベルではアクセントのトピックは難しすぎると思いません。どうもありがとうございました。
回答3. まずは、先生にありがたいと思います。いつも丁寧な説明をもらって、ありがとうございました。この授業はいろいろなテーマについて続けて行って、いろいろな知識や日常生活用語が勉強になりました。先生によく説明したり、宿題を直したりして、多様な授業方法を使ってから、学生よく勉強できました。この授業を取って、先生のご苦勞をおかげで、前より日本語を良くと思います。
回答4. よい点 zoomで先生とコミュニケーションは簡単です。 弱点 インタネットで友達相談することが難しいです。でもこの状況は仕方ありません。

7. 授業の改善点と今後の課題

今回のオンライン授業では、聴解授業の聞く部分を授業の外におき、個人作業の予習部分とし、自律学習の促進を目指した。また、理解した内容を授業の中で他者に説明すること、2回の【発表】を通して自分自身の視点からトピックを捉えなおして表現することで、表面的な理解に終わらない取り組みを意図した。

コースアンケートでは聞くことが上達したとの記述回答も見られたが、「Q3. この授業内容を理解できましたか」で「B. ややあてはまる」(回答数2)と答えていた回答者もいた。学習者によっては、上達の実感がはつきり得られない場合もあったと思われる。オンライン授業に感じた困難点では「グループワークがしにくい」と捉える学習者もいた。聞く力の伸びが実感できる工夫、オンライン授業においても、活発な対話が可能になるように、今後もシステムを最大限活用し、学習者の学びを創出する授業を

していきたいと思う。

注

- 1 NUCT (Nagoya University Collaboration and course Tools) はインターネット上で授業運営(授業の連絡、教材の閲覧、課題の指示、レポート提出等)を行う教育学習支援システム。
- 2 zoom オンライン会議やセミナーを行うために開発された経緯をもつ。インターネットにより映像(ビデオ)と音声を使って、オンライン会議(Web会議)を可能にしたクラウドサービスの一つ。有料版では40分の時間制限がなく、自由な授業設計が可能になった。
- 3 NUSS (Nagoya University Storage Service) は名古屋大学教職員向けのオンラインストレージサービスである。教育研究に関わるデータの保管・管理に関する利便性向上、教職員間での円滑なデータ共有の支援を目的としたものである。
- 4 秋学期は「小テスト・クイズ」の「受講者の音声による回答」機能を使い、シャドーイングの練習に利用した。

動画リンク

NHK ニュース動画「埼玉県 特措法に基づき県民に要請 2020年07月08日 17時46分」<https://www3.nhk.or.jp/shutoken-news/20200708/1000051131.html>
(最終閲覧日2020/7/9 2020/11/30現在は公開されていない)

参考文献

- 李澤熊 (2019) 「全学向け日本語プログラム2018年度」『名古屋大学国際機構国際言語センター年報』 6, pp.28-31
- 田中典子・近藤行人 (2019) 「内容理解を深めることを目指した中上級レベルの対話的聴解授業の試み」『日本語教育方法研究会誌』 25 (2), 86-87